

論説 インターネット時代のがん登録

岡本 直幸

神奈川県立がんセンター臨床研究所研究第三科

この20年の間に、HITACH、FACOM、TOSBACなどの言葉は巷ではほとんど聞かれなくなっていました。現在では、20年ほど前に年中エアコンがつけられた電算機室に在った大きなコンピュータと比較して、数百倍から数千倍の能力を有するパーソナルコンピュータやワードプロセッサが、われわれの卓上に置かれています。このすさまじい技術革新の流れの背景には、ホモ・ファベルとしての人類の弛まざる努力の必然性という潮流があるのかもしれない。

当然、これらのテクノロジーの進歩は、われわれの「がん登録」にもさまざまな恩恵を与え、かつ新しい分野への挑戦を促していると思われます。大量のがん登録データの処理を、驚くべき短時間で、忠実に間違えることなく実行し、指示するまでは確実に記憶し、データを保管した場所に何度も足を運ぶことなく検索が行え、必要時にデータの追加・訂正・削除が簡単にでき、困難な集計も解析も、われわれの思い通りの実行を可能にしてくれています。また、これらのコンピュータの利便さとともに発展してきたデータ通信技術によって、遠隔地間で、データやプログラムなど、全ての情報を共有できる可能性がでてきています。まさにインターネットは、その状況を示す象徴的な言葉であろうと思います。

このような加速度的な技術一般の進展は、ホモ・ファベルとしての人類を、**栄光のゴール**へと導いてくれているように思えますが、ホモ・サピエンスとしての人類に対しては、**新たな課題**を投げかけています。温暖化をはじめとする地球環境問題、エネルギー問題、民族問題、食糧問題などを例に挙げればこと足りるでしょう。これを、「がん登録」の立場から考えてみますと、臨床の場におけるインフォームドコンセント、診療録の開示、医師・公僕¹の守秘義務、公的機関の情報開示、病院機能評価²など、直接的には無関係と思われる事柄が、非常に重く感じられるようになってきています。院内がん登録は、病院というクローズドの環境の中での問題であるため、比較的、具体的な対応が可能であると思われませんが、**地域がん登録**の場合には、**公共性と地域性**をもつ存在であるということから、少々複雑な課題を負わされていると思います。その第一は、登録の役割や重要性を、医療関係者ではない一般の方々にも理解

し、認知してもらわねばならないということ、第二に、がん登録によって得られた統計数値を、どなたにも公平に、かつ適切に開示し利用してもらわねばならない、ということであろうと思います。その方法の1つとして、**インターネットの活用**を考えることが可能だと思います。ホームページによって「地域がん登録」を知っていただくことや、統計数値を活用していただくこと、登録室間で集計データを転送したりその共有を図ったりすることなどによって、課題解決への新しい局面が開けそうです。

ただし、インターネットを利用するには、それなりの責任が伴うことを銘記しておく必要があります。統計資料を公開するということは、それが一人歩きし、利用者の都合によって、情報発信者が考えもしなかった目的のために利用される危険性をはらんでいます。がん患者数や罹患率も、基本的な算出の条件や方法がある程度知らなければ、多くの誤解と誤った利用を生じかねません。細心の注意と何らかの**公開のためのルール作り**が急がれると思います。勿論、地域がん登録の、データの精度や登録作業の精度が維持されねばならないことは、前提条件として自明のことです。精度の高いデータを提供できなければ、がん登録の理解や認知には至らないでありましょうし、公開された統計も利用価値は低くなることでしょう。

今後、「がん登録」の実施に関わる環境は、厳しさを増してくるに違いありません。しかし世界の中では、**がんの治療やがん予防活動**にとって「がん登録」は**不可欠な資料**である、という認識が、広く行き渡っています。わが国のみが例外のままどまるということは、考えられません。現在のわが国での認識の不足は、わたくしども「がん登録」関係者の努力不足に原因があるのか、未だ多くの人々に「がん登録」の正しい情報が伝わっていないためか、はっきりとはしません。いずれにしろ、わたくしたちは、**がん登録関係者の間でルールを明確に作成した上で「公開」の原則**のもとに、インターネットを含めた各種の手法を用いて、専門家から一般の方まで、コンセンサスが得られるようながん統計の公開活動を、積極的に展開しなければならないと思います。

目次		
論説	1 登録室だより	5
研究班だより	2 IACR 学会報告	6
統計のページ	3 総会研究会報告	7
トピック	4 Q&A、研修案内	8